

二〇二二年四月一七日（造幣局参加者一五人）

大川の水満満と花日和	はく子
行厨の吾らにいまし花吹雪	"
異国語の案内や花の通り抜け	"
人波をのみてふくる花の道	"
花見船行く手に現れし天守閣	"
筏とはならず花屑たゆたへり	"
おにぎりを頼ばる吾に花吹雪	こすもす
水音の程よきリズム花見船	"
すれ違ふ船に手を振る花見船	"
花蛇もへりコプターも通り抜け	かれん
花びらの上に坐りて推敲す	"
花影に造幣局の門は威に	"
花の影総身まとひ通り抜け	菜々
花堤跨ぎて銀のアーチ橋	"
花吹雪菊の御紋の門柱に	"
うららかや雑事を忘れ吟行す	宏虎
呵呵大笑するが如くに大手毬	"
ガス灯の百余年てふ花の道	せいじ

ジェット機の低空飛行花堤	"
花屑を分けて水尾引く観光船	ぼんこ
たんぼぼの黄や行厨の靴の先	"
投句所もありて賑ふ花の道	有香
列なして並ぶ屋台や花堤	"
人を待つ句ひ桜に佇みて	きづな
花人ら一句を投ず通り抜け	"
川波にたゆたう花の屑畳	ひかり
一樹にてアーチをなせる大桜	明日香
花疲れ木陰にホ句を推敲す	泰三
絨緞のごと落花積む土手の道	よし子
ビルの間よりお城見ゆ花見船	満天
大川の行き交ふ船に花吹雪	"
花筵高級ワイン並びけり	"
老われも花へと翳すスマートホン	"

吟行句会みの選
二〇二二年四月一七日（造幣局参加者一五人）